九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

シーボルト『NIPPON』のロシア語版

宮崎, 克則
九州大学総合研究博物館

https://doi.org/10.15017/25333

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 8, pp.107-127, 2010-03. The Kyushu University Museum
バージョン：
権利関係：

九州大学総合研究博物館研究報告
Bull. Kyushu Univ. Museum
No. 8, 107-128, 2010

シーボルト『NIPPON』のロシア語版

宮崎克則

The Russian Version of Siebold 'NIPPON'

Katsunori MIYAZAKI

九州大学総合研究博物館：〒812-8581　福岡市東区箱崎 6-10-1
The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

はじめに

シーボルトは、1832年にオランダのライデンでドイツ語版『NIPPON』の自費出版を開始し、1851年までの約20年間に13回に分けて図版編と本文編を配本した（1858～59年頃「琉球諸島」等に関する部分が出る）。そしてドイツ語版をもとにオランダ語版、次いでフランス語版・ロシア語版が出た（1）。

オランダ語版は第1分冊のみであったといわれ、どのような内容であったか、実物を見ていないので詳しいことは不明である。ライデンにある「シーボルト・ハウス」の壁にその一部を見ることができる。「シーボルト・ハウス」は、彼が1832年に購入しさまざまな日本コレクションを陳列していた家であり、2004年に改装されて一般公開されている。改装時に壁紙の下張りからオランダ語版の一部が見つかり、そのまま展示されている。

フランス語版については別稿で述べている（2）。要約すると、1838～40年頃、シーボルトが監修し、モントリーとフレシネが翻訳し、フランス王ルイ・フィリップの第1王子オルレアン公の援助を受けてパリのベルトラン社が刊行した。どれほど売れたのか不明だが、フランス語版のタイトルは『Voyage au Japon』（日本旅行）に改題され、本文編は1巻と5巻のみ、図版編は12分冊（図版数71種83枚、うち12枚が手彩色）が出た。フランス語版の本文は1840年頃までに出ていたドイツ語版『NIPPON』のなかでまとまっていた旅行記と朝鮮についての記事で、図版はドイツ語版で使用した石版にフランス語のタイトル等を付して印刷されている。シーボルトは石版を再利用しているのである。

ロシア語版については、2つの説がある。ハンス・ケルナー『シーボルト父子伝』によと、「一部数章のロシア語訳」が1840年に2つの雑誌に掲載されたといい（3）、ヨーゼフ・クライナー編『黄昏のトクガワ・ジャパン』では、ドイツ語版『NIPPON』の「初版本からオランダ語版（第1分冊のみ）、フランス語版（5巻で全訳ではない）、ロシア語版（3巻でフランス語版による）がある」という（4）。

本稿では、ロシア語版についての2つの説を検証する。1840年の雑誌はどのような内容だったのか、また、フランス語版をもとにする3巻の本とはどのような内容なのだろうか。

〔注〕
（1）（4）ヨーゼフ・クライナー編『黄昏のトクガワ・ジャパン』264頁（NHK出版、1998年）。フランス語版に関する『黄昏のトクガワ・ジャパン』の誤りはすでに指摘している通り、5巻でなく、本文編は1巻と5巻である。
（2）宮崎克則「シーボルト『NIPPON』のフランス語版」（『九州大学総合研究博物館研究報告』6号、2008年）。
（3）ハンス・ケルナー『シーボルト父子伝』163頁（竹内精一訳、創造社、1974年）には、「一部数章のロシア語訳」として、（江戸への参府旅行の際の風習と儀式の叙述）（雑誌、祖国の息子）1840年第1部第2冊、376-428頁に掲載と、（江戸参府紀行から）（雑誌、軍の学校における教育読書雑誌）1840年第25部97号、13-73頁に掲載されたとある。

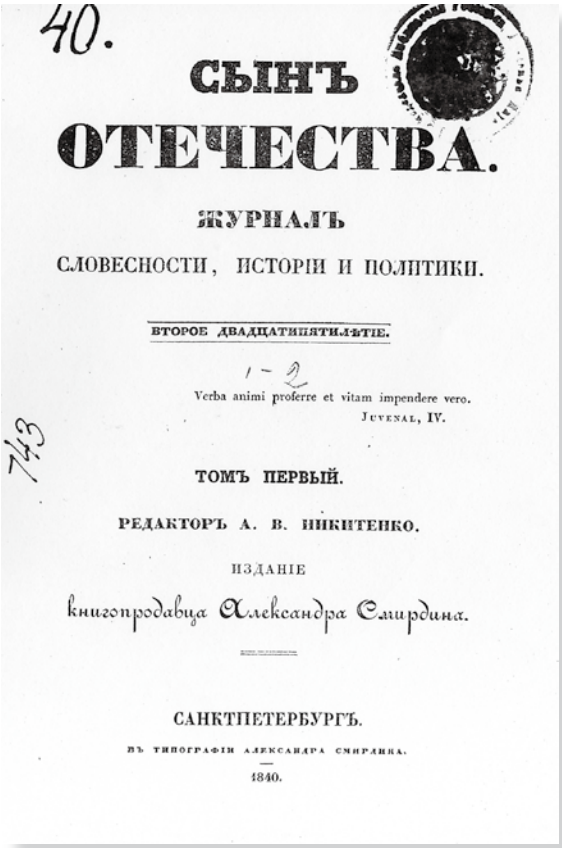
1. 1840年のロシア雑誌

1840年、サンクトペテルブルグで出た2つの雑誌の表紙を見てみる(1)。〔1〕の雑誌タイトルは「СЫНЪ ОТЕЧЕСТВА」(祖国の息子)とあり、その下に「ЖУРНАЛЪ СЛОВЕСНОСТИ, ИСТОРІИ И ПОЛИТИКИ」(文学・歴史・政治の雑誌)とある。「А.В.НИКИТЕНКО」(ニキーチェンコ)が編集し、「Александра Смирдина」(アレクサンダー・スミーレジン)が出版している。号数は不明な部分もあるが、1840年の第1巻(「ТОМЪ ПЕРВЫЙ」)であり、「心の中の叫び、真実を捧げる」とでも訳すべき詩も添えられている。「САНКТПЕТЕРБУРГЪ」(サンクトペテルブルグ)で出ている。

〔2〕のタイトルは、「ЖУРНАЛЪ ДЛЯ ЧТЕНІЯ ВОСПИТАННИКАМЪ ВОЕННОУЧЕБНЫХЪ ЗАВЕДЕНІЙ」(軍事教育学校の生徒たちのための読書雑誌)とあり、「И.ГЛАЗУНОВА」(イ.グラズノーヴ)が印刷した。1840年、25巻97号、サンクトペテルブルグで出た。

内容を見ると、雑誌「祖国の息子」は「VI」とあり、タイトル「江戸への参府旅行の際の風習と儀式の叙述」の下に前書きがあって本文が始まる。ページ数は377〜428頁である。「軍事教育学校の生徒たちのための読書雑誌」はタイトルに「НРОЗА」(散文)、「ПУТЕВЫЯ ЗАПИСКИ ЗИБОЛЬДА」(シーボルトの紀行)が付け加えられ、同じく「江戸への参府旅行の際の風習と儀式の叙述」の下に前書きがあって本文が始まる。ページ数は13〜73頁である。2つの雑誌はともに活字の組み方が違うだけで、前書きは同文であり、本文も「軍事教育学校の生徒たちのための読書雑誌」に少しの省略がある程度でほぼ同じ文章である(2)。両者は同じ原稿をもとに編集されたと考えられるが、翻訳者の名前などは何も記されていない。

〔1〕「祖国の息子」


40.

СЫНЪ ОТЕЧЕСТВА.

ЖУРНАЛЪ

СЛОВЕСНОСТИ, ИСТОРІИ И ПОЛИТИКИ.

ВТОРОЕ ДВАДЦАТИПЯТИЛѢТІЕ.

1-2

Verba animi proferre et vitam impendere vero.
JUVENAL, IV.

743

ТОМЪ ПЕРВЫЙ.

РЕДАКТОРЪ А. В. НИКИТЕНКО.

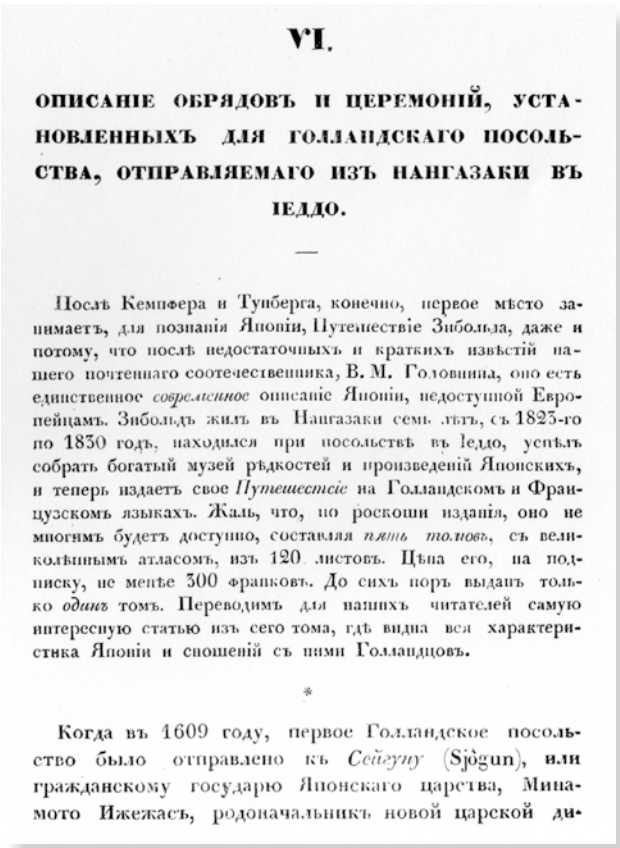
ИЗДАНІЕ

книгопродавца Александра Смирдина.

САНКТПЕТЕРБУРГЪ.

ВЪ ТИПОГРАФІИ АЛЕКСАНДРА СМИРДИНА.

1840.


VI.

ОПИСАНІЕ ОБРЯДОВЪ И ЦЕРЕМОНІЙ, УСТАНОВЛЕННЫХЪ ДЛЯ ГОЛЛАНДСКАГО ПОСОЛЬСТВА, ОТПРАВЛЯЕМАГО ИЗЪ НАНГАЗАКИ ВЪ ІЕДДО.

—

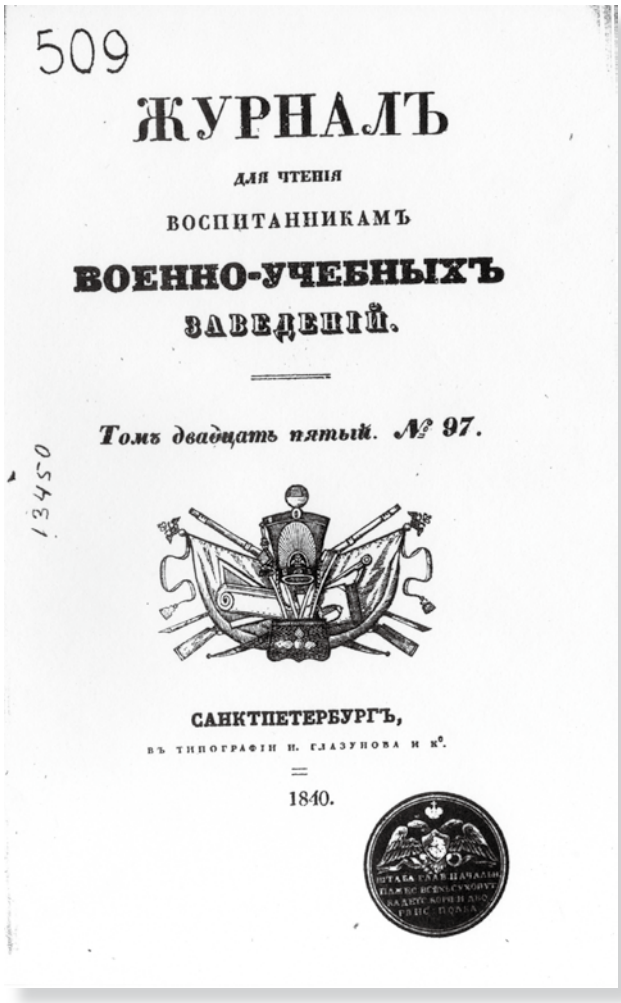
Послѣ Кемпфера и Тунберга, конечно, первое мѣсто занимаетъ, для познанія Японіи, Путешествіе Зибольда, даже и потому, что послѣ недостаточныхъ и краткихъ извѣстій нашего почтеннаго соотечественника, В. М. Головнина, оно есть единственное *современное* описаніе Японіи, недоступной Европейцамъ. Зибольдъ жилъ въ Нангазаки семь лѣтъ, съ 1823-го по 1830 годъ, находился при посольствѣ въ Іеддо, успѣлъ собрать богатый музей рѣдкостей и произведеній Японскихъ, и теперь издаетъ свое *Путешествіе* на Голландскомъ и Французскомъ языкахъ. Жаль, что, по роскоши изданія, оно не многимъ будетъ доступно, составляя *пять толстыхъ*, съ великолѣпнымъ атласомъ, изъ 120 листовъ. Цѣна его, на подписку, не менѣе 300 франковъ. До сихъ поръ выданъ только *одинъ* томъ. Переводимъ для нашихъ читателей самую интересную статью изъ сего тома, гдѣ видна вся характеристика Японіи и сношеній съ ними Голландцовъ.

*

Когда въ 1609 году, первое Голландское посольство было отправлено къ *Сейгуну* (Sjôgun), или гражданскому государю Японскаго царства, Минамото Ижежасъ, родоначальникъ новой царской ди-

ロシア科学アカデミー図書館蔵

〔2〕「軍事教育学校の生徒たちのための読書雑誌」


509

ЖУРНАЛЪ

ДЛЯ ЧТЕНІЯ

ВОСПИТАННИКАМЪ

ВОЕННО-УЧЕБНЫХЪ

ЗАВЕДЕНІЙ.

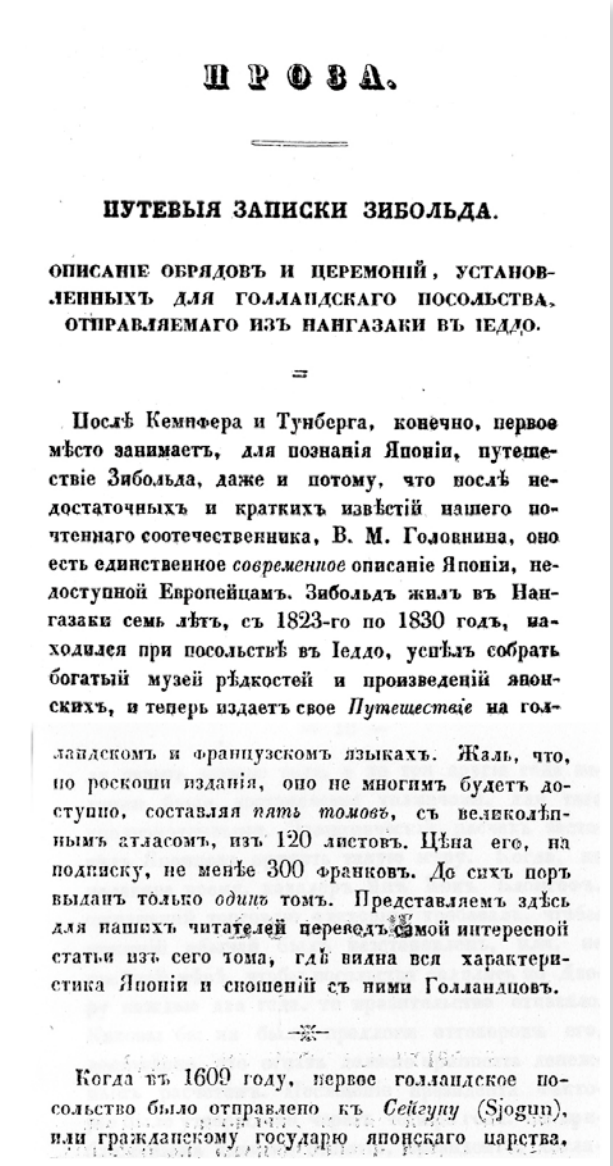
Томъ двадцать пятый. № 97.

13450

САНКТПЕТЕРБУРГЪ,

ВЪ ТИПОГРАФІИ И. ГЛАЗУНОВА И К°.

1840.


ПРОЗА.

ПУТЕВЫЯ ЗАПИСКИ ЗИБОЛЬДА.

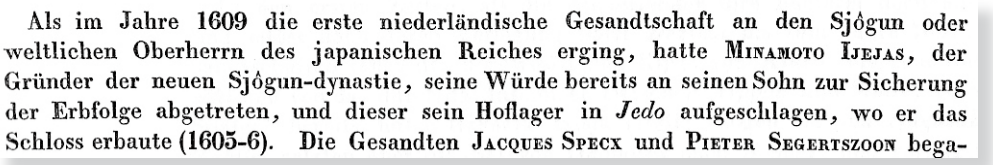
ОПИСАНІЕ ОБРЯДОВЪ И ЦЕРЕМОНІЙ, УСТАНОВЛЕННЫХЪ ДЛЯ ГОЛЛАНДСКАГО ПОСОЛЬСТВА, ОТПРАВЛЯЕМАГО ИЗЪ НАНГАЗАКИ ВЪ ІЕДДО.

Послѣ Кемпфера и Тунберга, конечно, первое мѣсто занимаетъ, для познанія Японіи, путешествіе Зибольда, даже и потому, что послѣ недостаточныхъ и краткихъ извѣстій нашего почтеннаго соотечественника, В. М. Головнина, оно есть единственное *современное* описаніе Японіи, недоступной Европейцамъ. Зибольдъ жилъ въ Нангазаки семь лѣтъ, съ 1823-го по 1830 годъ, находился при посольствѣ въ Іеддо, успѣлъ собрать богатый музей рѣдкостей и произведеній японскихъ, и теперь издаетъ свое *Путешествіе* на голландскомъ и французскомъ языкахъ. Жаль, что, по роскоши изданія, оно не многимъ будетъ доступно, составляя *пять томовъ*, съ великолѣпнымъ атласомъ, изъ 120 листовъ. Цѣна его, на подписку, не менѣе 300 франковъ. До сихъ поръ выданъ только *одинъ* томъ. Представляемъ здѣсь для нашихъ читателей переводъ самой интересной статьи изъ сего тома, гдѣ видна вся характеристика Японіи и сношеній съ ними Голландцовъ.

Когда въ 1609 году, первое голландское посольство было отправлено къ *Сейгуну* (Sjogun), или гражданскому государю японскаго царства,

ロシア科学アカデミー図書館蔵

〔3〕ドイツ語版『NIPPON』旅行記の冒頭


Als im Jahre 1609 die erste niederländische Gesandtschaft an den Sjôgun oder weltlichen Oberherrn des japanischen Reiches erging, hatte Minamoto Ijejas, der Gründer der neuen Sjôgun-dynastie, seine Würde bereits an seinen Sohn zur Sicherung der Erbfolge abgetreten, und dieser sein Hoflager in *Jedo* aufgeschlagen, wo er das Schloss erbaute (1605-6). Die Gesandten Jacques Specx und Pieter Segertszoon bega-

九州大学付属図書館医学分館蔵

ともに本文は、1609年にオランダ使節が将軍を訪問した記述から始まる。参考のためにドイツ語版初版『NIPPON』旅行記の冒頭部分も掲示しておく。同じようにオランダ使節の将軍訪問から始まっており、ドイツ語版に沿って翻訳されていることが分かる。ドイツ語版『NIPPON』において、江戸参府の記事は第5回配本から出ている。5回配本の目録「INHALT」には(3)、

NIPPON　Ⅱ
陸・海の旅
1826年における将軍の宮殿へ向かう旅
　Ⅰ章　通常に行われる江戸への参府旅行の概要、参府の公使である在日のオランダ商館の理事のために批判的に書かれた手引き…ページ1
　Ⅱ章　1826年江戸参府旅行の序文……ページ31
　Ⅲ章　長崎から小倉までの旅行……ページ50

とあり、6回配本の「INHALT」には、

NIPPON　Ⅱ
陸・海の旅
1826年における将軍の宮殿へ向かう旅
　Ⅲ章　長崎から小倉までの旅行(続き)
　……ページ53～88

とあり、8回・11回配本でも続きが出る。2つの雑誌は、江戸参府の記事すべてを訳しているのでなく、5回配本で出た「概要」(Ⅰ章 通常に行われる江戸への参府旅行の概要、参府の公使である在日のオランダ商館の理事のために批判的に書かれた手引き)のみを翻訳している。5回配本の正確な年代は不明ながら、『NIPPON』第1回配本は1832年、7回配本は1839年10月であるから(4)、5回配本は1839年以前である。1840年、江戸参府の「概要」をロシア語に翻訳して雑誌に掲載することは可能である。

ロシアの雑誌がどのような性格のものであったか、他に掲載されている記事も検討しなければならないが、かつてロシア帝国の首都であったサンクトペテルブルグには、今も市の中心部に旧海軍省や「冬の宮殿」であったエルミタージュ美術館の建物が残っている。軍事関係の教育施設などで使用するため、シーボルトの江戸参府「概要」のみを翻訳して速報したものと考えられる。シーボルト『NIPPON』のごく一部の翻訳であった。「祖国の息子」は1812～1852年に刊行され、「軍事教育学校の生徒たちのため読書雑誌」は1836～1863年に出ている(5)。

〔注〕
(1)ロシア科学アカデミー図書館蔵、サンクトペテルブルグ。
(2)(5)サンクトペテルブルグにあるクンストカーメラ<民族学博物館>のアンドレイ氏(Andrey Sokolov)のご教示による。
(3)(4)宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の配本」(『九州大学総合研究博物館研究報告』3号、2005年)。

2. 3巻本ロシア語版(『ПУТЕШЕСТВІЕ ПО ЯПОНІИ』)の検討

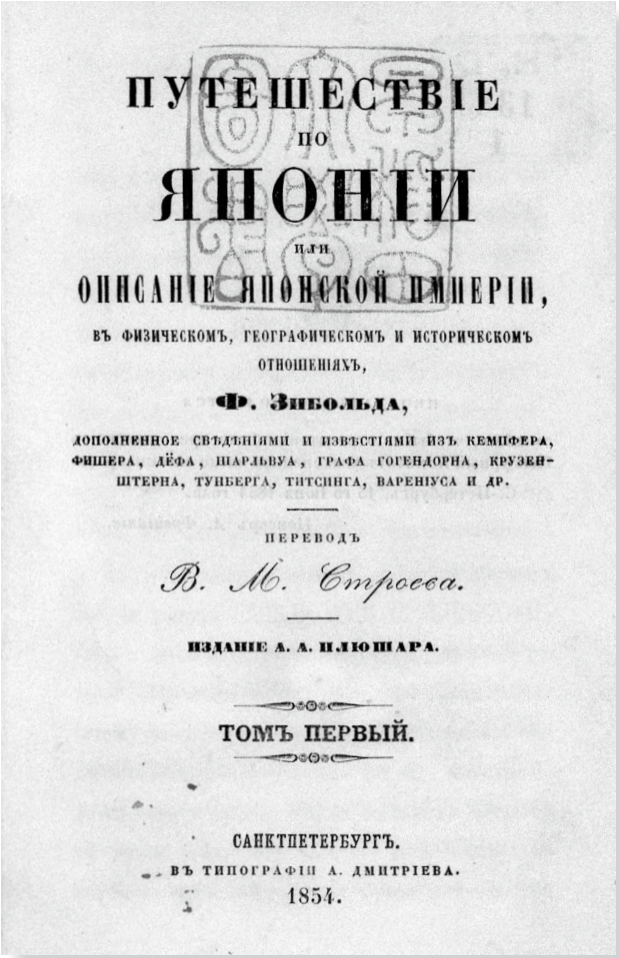
ヨーゼフ・クライナー編『黄昏のトクガワ・ジャパン』には、『NIPPON』のロシア語版は「ロシア語版(3巻でフランス語版による)」とある。この記述のもとになったのは、梶輝行「シーボルト『日本』の翻訳版」(『洋学史研究』6号、1989年)と思われ、そこには「本版(ロシア語版)は『日本』のドイツ語版ではなくフランス語版に基づいて翻訳された。それは書名からも窺える他、図版に付された標題がフランス語とロシア語が併記されていること、それに本版の構成や註記にもフランス語版に依拠したものであることを指摘できる」とある。フランス語版をもとにするのだろうか。

現在までに、神奈川大学図書館【A291-1-6】を始め、早稲田大学図書館【HD1383】、東洋文庫【XⅦ-2-E-28】、ロシア国立図書館【1075 23/3】(サンクトペテルブルグ)、クンストカーメラ(国立民族学博物館)【N-318】(サンクトペテルブルグ)の所蔵本を確認した。

〔4〕 ロシア語版　全体

神奈川大学図書館蔵

〔5〕 ロシア語版　内表紙



ПУТЕШЕСТВІЕ
ПО
ЯПОНІИ
ИЛИ
ОПИСАНІЕ ЯПОНСКОЙ ИМПЕРІИ,
ВЪ ФИЗИЧЕСКОМЪ, ГЕОГРАФИЧЕСКОМЪ И ИСТОРИЧЕСКОМЪ
ОТНОШЕНІЯХЪ,
Ф. ЗИБОЛЬДА,
ДОПОЛНЕННОЕ СВѢДѢНІЯМИ И ИЗВѢСТІЯМИ ИЗЪ КЕМПФЕРА,
ФИШЕРА, ДЁФА, ШАРЛЬВУА, ГРАФА ГОГЕНДОРНА, КРУЗЕН-
ШТЕРНА, ТУНБЕРГА, ТИТСИНГА, ВАРЕНІУСА И ДР.
ПЕРЕВОДЪ
В. М. Строева.
ИЗДАНІЕ А. А. ПЛЮШАРА.
ТОМЪ ПЕРВЫЙ.
САНКТПЕТЕРБУРГЪ.
ВЪ ТИПОГРАФІИ А. ДМИТРІЕВА.
1854.

早稲田大学図書館蔵

【翻訳】

日本をめぐる旅
あるいは
自然科学的･地理学的･歴史的見地から日本帝国の記述
シーボルトによる

ＫＥＭＰＦＥＲＡ（ケンペル）、ＦＩＳＨＥＲＡ（フィッセル）、ＤＥＦＡ、ＣＨＡＲＬＥＶＯＩＸ（シャルルボワ）、ＧＲＡＦＡ ＨＯＧＥＮＤＯＲＮＡ（Hogendorp）、ＫＲＵＺＥＮＳＴＥＲＮＡ（クルーゼンシュテルン）、ＴＵＮＢＥＲＧＡ（ツンベルグ）、ＴＩＴＳＩＮＧＡ（ティツィング）、ＶＡＲＥＮＩＵＳＡ（ヴァレニウス）などからの情報と報告によって追加された

翻訳
Ｖ.Ｍ.Ｓｔｒｏｅｖａ
（ヴラジーミル　ミハイロビッチ　ストローエフ）
Ａ.Ａ.ＰＬＵＳＨＡＲＡ　出版
（アドルフ　アレクサンドル　プルチャート）

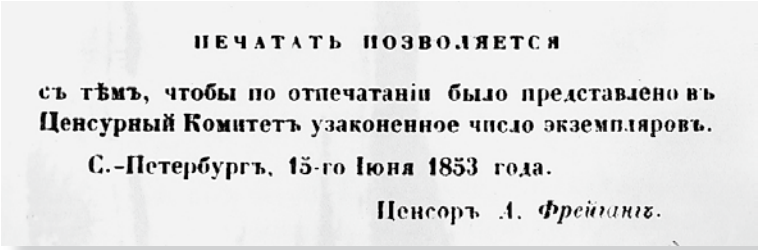
第1巻

サンクトペテルブルグ
A.ドミトリー印刷所にて
1854

……

本の形状は縦18cm×横12cmの小型であり、1冊に合冊された東洋文庫本を除くと、他はすべて3冊本となっている。図版の数は全部で15枚、石版で印刷されている。内表紙を見ると、本書がシーボルトを主体としながら、ケンペル、フィッセル、シャルルボワ、クルーゼンシュテルン、ティツィング、ヴァレニウスなども参考にしていることが分かる。翻訳したのはストローエフ。彼の生存年は1816～62年、当時のロシアにおけるすぐれたフランス語とドイツ語の翻訳者であり、記者でもあった（1）。出版者はプルチャートとある。プルチャートは1806年にフランスからサンクトペテルブルグへ移住、海軍省にあった印刷所の筆頭となり、後に独立した。1854年に出版された本書はその息子の代に出ている（2）。

〔6〕 印刷許可



ПЕЧАТАТЬ ПОЗВОЛЯЕТСЯ

съ тѣмъ, чтобы по отпечатаніи было представлено въ Цензурный Комитетъ узаконенное число экземпляровъ.

С.-Петербургъ, 15-го Іюня 1853 года.

Цензоръ А. Фрейганъ.

神奈川大学図書館蔵

【翻訳】

印刷許可

検閲委員会に見本を提出し刊行を許可される。

サンクトペテルブルグ　1853年6月15日

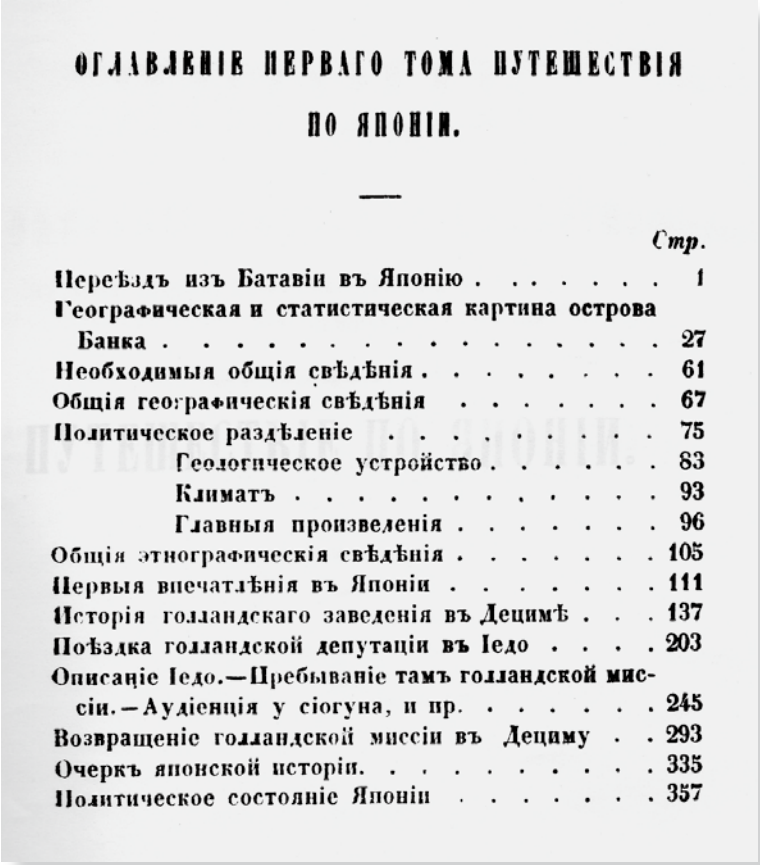
ツェンサル.A.ワレイガノグ

……

内表紙の裏には印刷許可がある。検閲委員会はロシア文部省付属として1804年に設立されていた(3)。許可日は1853年6月15日であるから、それまでに原稿は出来あがっていたことになる。

各巻の目次は、それぞれの巻の最後にまとめられている。第1巻目次を見ると、

〔7〕 第1巻　目次



ОГЛАВЛЕНІЕ ПЕРВАГО ТОМА ПУТЕШЕСТВІЯ ПО ЯПОНІИ.

—

Стр.

Переѣздъ изъ Батавіи въ Японію 1
Географическая и статистическая картина острова Банка 27
Необходимыя общія свѣдѣнія 61
Общія географическія свѣдѣнія 67
Политическое раздѣленіе 75
Геологическое устройство 83
Климатъ 93
Главныя произведенія 96
Общія этнографическія свѣдѣнія 105
Первыя впечатлѣнія въ Японіи 111
Исторія голландскаго заведенія въ Децимѣ . . . 137
Поѣздка голландской депутаціи въ Іедо 203
Описаніе Іедо.—Пребываніе тамъ голландской миссіи.—Аудіенція у сіогуна, и пр. 245
Возвращеніе голландской миссіи въ Дециму . . 293
Очеркъ японской исторіи. 335
Политическое состояніе Японіи 357

神奈川大学図書館蔵

【翻訳】

第1巻目次　日本への旅

バタヴィアから日本への旅	1
バンカ島の地理･統計に関する記述	27
必須の基本情報	61
基本的な地理情報	67
政治的な分割	75
地質の構造	83
気候	93
主要な産業	96
基本的な民俗情報	105
日本についての第一印象	111
出島におけるオランダ商館の歴史	137
江戸へのオランダ人使節団の旅	203
江戸の記述―そこでのオランダ使節団の滞在―将軍との謁見	245
オランダ人使節団の出島への帰還	293
日本の歴史の概要	335
日本の政治状況	357

……

バタビアから日本への旅行記やオランダ商館の歴史が含まれており、シーボルト『NIPPON』からの

〔8〕 ケンペルからの引用

таются разстоянія во всѣ пункты имперіи, и *Іедо-Бассъ* (по Кемпферу *Іедо-Баши*) или мостъ Іедо (*).
(ケンペル)

神奈川大学図書館蔵

翻訳を伺わせるが、江戸滞在の記事が含まれているのは注目される。なぜならば、ドイツ語版『NIPPON』における江戸参府の記事は瀬戸内の室（兵庫県たつの市）までで中断していたからである。室から以東の大坂、東海道、さらに江戸滞在についての記事が出たのは第2版においてである。『NIPPON』第2版は明治30年（1897）、シーボルトの死後、2人の息子（アレキサンダーとハインリッヒ）が残っていたシーボルトの原稿などをもとに修正・加筆して刊行した。これはシーボルトの生誕100年を記念して日本からも旧大名の華族などが後援して出版されたものであった。初版本『NIPPON』に江戸滞在の記事はなかったにもかかわらず、ストローエフは何をもとに書いたのだろうか。本文中には「ケンペルによれば」という記述がある。ケンペル『日本誌』は、ケンペル死後の1727年に英語版が刊行され、すぐにフランス語版・オランダ語版にも翻訳されて、ヨーロッパにおける日本研究のバイブルとなっていた。ストローエフは、『NIPPON』において欠けていた江戸滞在の記事をケンペル『日本誌』から補っているのである。

〔9〕 第2巻　目次

ОГЛАВЛЕНІЕ ВТОРАГО ТОМА ПУТЕШЕСТВІЯ ПО ЯПОНІИ.

Стр.

Нравы и обычаи Японцевъ 1
Общественное состояніе и частная жизнь . —
Характеръ Японцевъ 37
Японская миѳологія и религіозныя секты въ Японіи 59
Языкъ японскій.—Азбука —Литература и поэзія . 81
Науки въ Японіи. 99
Искусства и мануфактуры у Японцевъ. 115
Торговля и мореплаваніе 127
Усилія Европейцевъ вступить въ сношенія съ Японіею. 155
Японскія заведенія на югѣ и сѣверѣ Японіи . . 227
Іезо и сосѣднія земли 229
Острова Ліу-Кіу. 259
Хронологическая таблица 269
Таблица мѣры, вѣса и монетъ. 277
Приложеніе: Порошокъ-дозіа и изобрѣтатель его Кобу-Дайси 287

神奈川大学図書館蔵

【翻訳】

第2巻目次　日本への旅

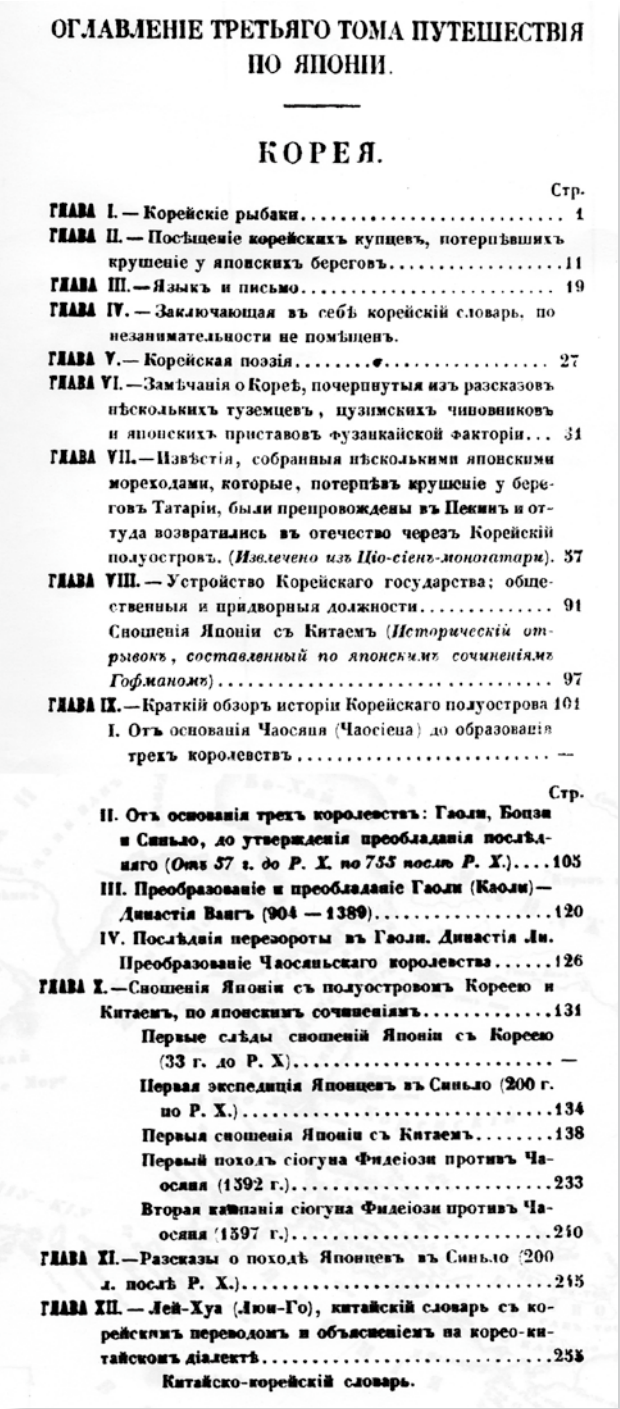
日本人の風習・慣習　1
　－社会状況と個人の生活－
日本人の性格　37
日本の神話と宗教　59
日本語－アルファベット－文学と詩　81
日本の科学　99
日本の芸術と産業　115
商業と海運　127
日本へ参入するためのヨーロッパ人の努力　155
日本列島の南と北に存在する日本の領土　227
蝦夷と近隣の国々　229
琉球列島　259
年表　269
度量・重量と貨幣の表　277
付録　「DOJIA」という散薬とこれの発明者、弘法大師　287

第2巻の目次を見ると、日本人の習慣や宗教、科学や産業などは『NIPPON』からの翻訳と考えられるが、最後の「付録」はまったく関係ない。「DOJIA」は「土砂」であり、ティツィング『日本風俗図誌』（4）第2部第11章「土砂（dosia）とその発明者弘法大師についての記事」からの引用であ

る。ティツィングによると、粉末状の「土砂」を死者の鼻孔や口から入れると硬直した死体が柔らかくなり、棺桶に入れることができるようになるもので、弘法大師（空海）が作ったという。彼はこれに興味を持ち、高野山から「土砂」を取り寄せ持ち帰っていた。ストローエフもこれに興味を持ち、ここに加えたのであろう。

第3巻の目次を見よう。この3巻の目次を、フランス語版『NIPPON』の本文編5巻の目次と比べると、ともに朝鮮についての記事で、ほぼ同じ構成となっている。つまり、ロシア語版の3巻のみがフランス語版からの翻訳とすべきである。

〔10〕 第3巻　目次



ОГЛАВЛЕНІЕ ТРЕТЬЯГО ТОМА ПУТЕШЕСТВІЯ ПО ЯПОНІИ.

КОРЕЯ.

Стр.

ГЛАВА I. — Корейскіе рыбаки 1
ГЛАВА II. — Посѣщеніе корейскихъ купцевъ, потерпѣвшихъ крушеніе у японскихъ береговъ 11
ГЛАВА III. — Языкъ и письмо 19
ГЛАВА IV. — Заключающая въ себѣ корейскій словарь, по незанимательности не помѣщенъ.
ГЛАВА V. — Корейская поэзія 27
ГЛАВА VI. — Замѣчанія о Кореѣ, почерпнутыя изъ разсказовъ нѣсколькихъ туземцевъ, цузимскихъ чиновниковъ и японскихъ приставовъ фузанкайской факторіи ... 31
ГЛАВА VII. — Извѣстія, собранныя нѣсколькими японскими мореходами, которые, потерпѣвъ крушеніе у береговъ Татаріи, были препровождены въ Пекинъ и оттуда возвратились въ отечество черезъ Корейскій полуостровъ. (*Извлечено изъ Ціо-сіенъ-моногатари*). 57
ГЛАВА VIII. — Устройство Корейскаго государства; общественныя и придворныя должности 91
Сношенія Японіи съ Китаемъ (*Историческій отрывокъ, составленный по японскимъ сочиненіямъ Гофманомъ*) 97
ГЛАВА IX. — Краткій обзоръ исторіи Корейскаго полуострова 101
I. Отъ основанія Чаосяня (Чаосіена) до образованія трехъ королевствъ ..... —

Стр.

II. Отъ основанія трехъ королевствъ: Гаоли, Боцзи и Синьло, до утвержденія преобладанія послѣдняго (*Отъ 57 г. до Р. Х. по 755 послѣ Р. Х.*) 105
III. Преобразованіе и преобладаніе Гаоли (Каоли) — Династія Вангъ (904 — 1389) 120
IV. Послѣднія перевороты въ Гаоли. Династія Ли. Преобразованіе Чаосяньскаго королевства 126
ГЛАВА X. — Сношенія Японіи съ полуостровомъ Кореею и Китаемъ, по японскимъ сочиненіямъ 131
Первые слѣды сношеній Японіи съ Кореею (33 г. до Р. Х) ..... —
Первая экспедиція Японцевъ въ Синьло (200 г. по Р. Х.) 134
Первыя сношенія Японіи съ Китаемъ 138
Первый походъ сіогуна Фидеіоши противъ Чаосяня (1592 г.) 233
Вторая кампанія сіогуна Фидеіоши противъ Чаосяня (1597 г.) 240
ГЛАВА XI. — Разсказы о походѣ Японцевъ въ Синьло (200 л. послѣ Р. Х.) 245
ГЛАВА XII. — Лей-Хуа (Люи-Го), китайскій словарь съ корейскимъ переводомъ и объясненіемъ на корео-китайскомъ діалектѣ 258
Китайско-корейскій словарь.

神奈川大学図書館蔵

【翻訳】

第3巻目次　日本への旅

朝　　鮮

1章　朝鮮の漁師　1
2章　日本沿岸へ漂着した朝鮮人商人との面会　11
3章　言語と文字　19
4章　語彙　面白くないので入れていない
5章　朝鮮の詩　27
6章　朝鮮人、対馬の役人、釜山における日本商館などから得た種々の情報　31
7章　韃靼国沿岸で難破して北京へ行き、そこから朝鮮を経て故郷に帰った日本の漁夫たちによる報告（『朝鮮物語』からの引用）　57
8章　朝鮮王国の制度、高官と廷臣　91
－日中関係（日本の作品によるホフマンの作成した歴史的物語）－　97
9章　朝鮮半島の歴史総説　101
10章　日本の作品による朝鮮半島・中国と日本の関係　131
11章　西暦200年　日本の新羅遠征の伝説　245
12章　中国・朝鮮の辞書「類合」　253
－朝鮮語訳および中国語の朝鮮読み併記－
中国・朝鮮の辞書

フランス語版『NIPPON』（『Voyage au Japon』）本文編第5巻の目次

1章　朝鮮人漁夫の肖像
2章　日本の沿岸に難破した朝鮮人商人との面会
3章　言語と文字
4章　語彙
5章　朝鮮の詩
6章　朝鮮に関する覚書

7章　韃靼国沿岸で難破して北京へ行き、そこから朝鮮を経て故郷に帰った日本の漁夫たちによる報告。日本の書物『朝鮮物語』からの抜粋
8章　朝鮮王国の制度、高官と廷臣
9章　朝鮮半島史総説
10章　日本の文献に基づく日本と朝鮮半島および中国との交渉
11章　日本の新羅遠征の伝説（西暦200年）
12章　類合、朝鮮語の訳語と朝鮮-中国方言の同等のもの【朝鮮漢字音】がつけられた中国語の語彙、J. ホフマンによる翻訳と改訂

以上、1854年、サンクトペテルブルグで刊行されたロシア語版といわれる3巻本は、当時のロシアで活躍していた翻訳者・記者のストローエフが、シーボルト『NIPPON』の他にケンペルやティツィングなどの成果も取り入れてまとめたものであることが、目次の検討から判明した。図版は何をもとにしているだろうか。

〔注〕
（1）（2）（3）クンストカーメラ<民俗学博物館>のアンドレイ氏（Andrey Sokolov）のご教示による。
（4）『日本風俗図誌』（異国叢書7、雄松堂、1970年）。ティツィング【Titsingh】（1744頃～1812）はオランダのアムステルダムに生まれ、1779年（安永8）～80年、1781年（天明11）～83年、1784年（天明4）の3回にわたって出島のオランダ商館長を勤め、1780·82年に江戸参府した。福知山藩主朽木昌綱·鹿児島藩主島津重豪らの大名と接触し、蘭学者では桂川甫周·中川淳庵、さらに長崎奉行久世広民やオランダ通詞吉雄幸作らと親交あり。離日後の1785年にベンガル長官、93年には大使として清国に至り乾隆帝に謁見した。1796年に退職してロンドンに移住し、ついでパリに移り、日本関係資料の整理·翻訳および執筆に努め、フランスの東洋学者レミュザ、クラプロートらと交流していたが、1812年に病没した。レミュザ、クラプロートらが遺稿をもとに校訂し、1820年『歴代将軍譜』（パリ刊、フランス語）、1822年『日本風俗図誌』（ロンドン刊、英語）、1834年に『日本王代一覧』（ロンドン·パリ刊、フランス語）などが刊行され、婚礼·葬式などの風俗習慣、日本史の他に田沼政権の対外政策、浅間山噴火などの同時代的な記事が紹介された。

3.ロシア語版の図版

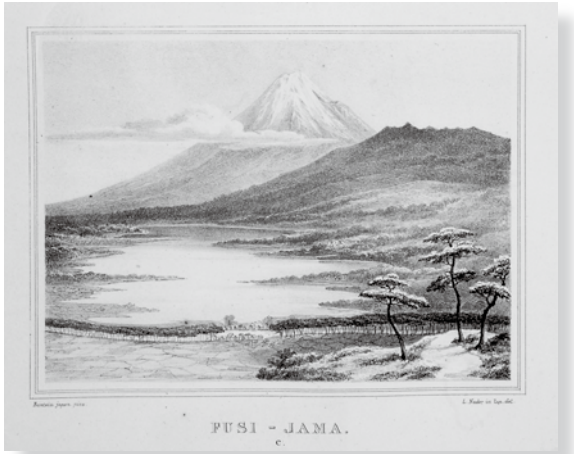
ロシア語版には15枚の図版がある。図版は本文と違う紙に印刷され版型も少し大きいので、製本にあたって端をカットしたり、或いは折り込んで挿入されている。最初の図版は富士山（内寸　縦8.9㎝×横13.9㎝）である。サンクトペテルブルグにあるロシア国立図書館本を掲載する。国立図書館の貴重書閲覧室では、カメラによる写真撮影はできなかったが、コピーは可能であった。依頼して通常のコピー機でコピーしてもらった画像である。中央上部に「JAPON」とあるから、フランス語版からの引用を想像させるが、フランス語版『NIPPON』（『Voyage au Japon』）に富士山の絵はない。さらに右肩に「3」とあることも不思議である。「1」「2」の番号を付した図版はないからである。中央下部には「Montagne Fousi（Fusi-Yama）」とあり、その右に異筆のロシア語で「ГОРА　ФУЗИ（ФУЗИ-ЯМА）」（富士山　フジヤマ）とある。ドイツ語版『NIPPON』の図版と比べると、同じ石版でなく、新たな石版による印刷であることが分かる。

次に化粧室の絵を見てみよう。この化粧室の絵はフランス語版でも出ているので、両者を比べると、下部のタイトルが異なる。ともにフランス語であるが、〔14〕は「LA TOILETTE」、〔13〕は「Scene de lanre prioee, la toillete」となっている。ロシア語版の図版は、フランス語版として出た図版のタイトルを踏襲していないのである。別稿において（1）、フランス語版『NIPPON』の図版は、シーボルトによる監修のもとにドイツ語版で使用された石

〔11〕　富士山（ロシア語版）

ロシア国立図書館蔵

〔12〕　富士山（ドイツ語版『NIPPON』）

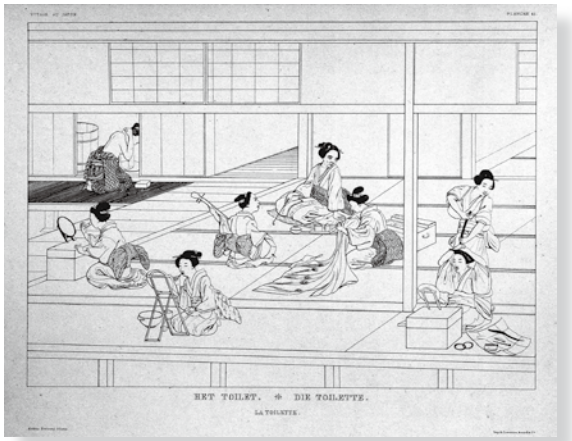


九州大学付属図書館医学分館蔵

〔13〕　化粧室（ロシア語版）

神奈川大学図書館蔵

〔14〕　化粧室（フランス語版『NIPPON』）



シーボルト記念館蔵

版にフランス語のタイトルなどを追加して印刷されたことを明らかにしたが、ロシア語版の図版は全く別の石版で印刷されており、シーボルトの関与も確認できない。

新たな石版で印刷された15枚のロシア語版図版は、その原画をシーボルト『NIPPON』のなかに見いだすことができるが、1点だけ確認できない絵がある。それは「江戸の皇帝の宮殿」である。これは何をもとにするのか。モンタヌス『日本誌』を見てみる。オランダの牧師モンタヌスは、宣教師の報告や東インド会社の記録をもとに1669年『日本誌』をアムステルダムで刊行した。彼は来日したことはなく、全般的に興味本位な内容となっており、挿絵も想像図が多い。ここでは1680年刊のフランス語版を掲載している。ほぼ同じ構図の図版であることが分かろう。この1枚のみがシーボルト『NIPPON』からでなく、モンタヌス『日本誌』の図版から引用されている。

ロシア語版の図版がどのように作成されたのかを知るために、図の右下にある「Lemaître」が手掛かりを与えてくれる。通常、石版画の右下や左下の部分には版画の作者名が記される。「Lemaître」については、パリで活動していた石版画家に「Augustin François Lemaître」（オーギュスタン・フランソワ・ルメットル、1797-1880年）という人物がいる（2）。しかし、サンクトペテルブルグで刊行されたロシア語版の図版作成者を、パリのルメットルと即断することはできない。そこで、ルメットルがどのような石版画を描いたのかを調べるため、1850年前後にフランスで出た本を調査した。その結果、1850年にパリで刊行された『JAPON,INDO-CHINA』（日本、インドシナ）（3）の図版に彼の名前を見出すことができた。『JAPON,INDO-CHINA』の著者は、フランスの外交官でアジアに滞在した東洋学者の「M.DUBOIS DE

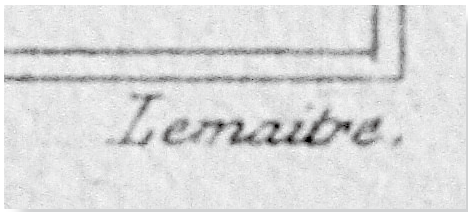
〔15〕 江戸の皇帝の宮殿

神奈川大学図書館蔵

〔16〕 モンタヌス『日本誌』

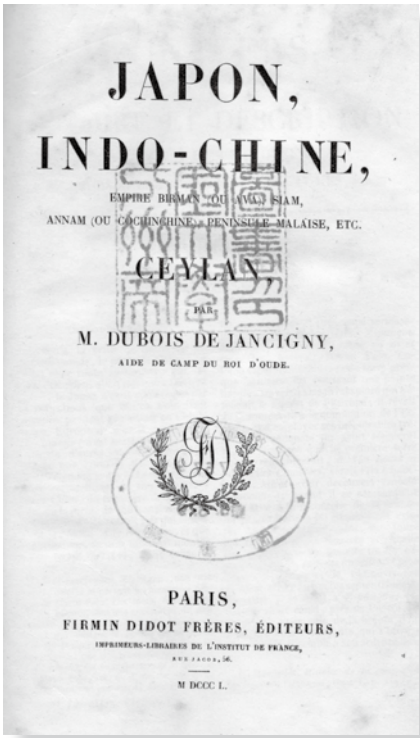
九州大学付属図書館蔵

〔17〕 ロシア語版の石版画家名



クンストカーメラ蔵

〔18〕 『日本,インドシナ』の内表紙



JAPON,

INDO-CHINE,

EMPIRE BIRMAN (OU AVA), SIAM,
ANNAM (OU COCHINCHINE), PENINSULE MALAISE, ETC.

CEYLAN

PAR,

M. DUBOIS DE JANCIGNY,

AIDE DE CAMP DU ROI D'OUDE.

PARIS,

FIRMIN DIDOT FRÈRES, ÉDITEURS,

IMPRIMEURS-LIBRAIRES DE L'INSTITUT DE FRANCE,

M DCCC L.

九州大学付属図書館蔵

〔19〕『JAPAN,INDO-CHINA』(九州大学付属図書館蔵)

INDO-CHINE 1

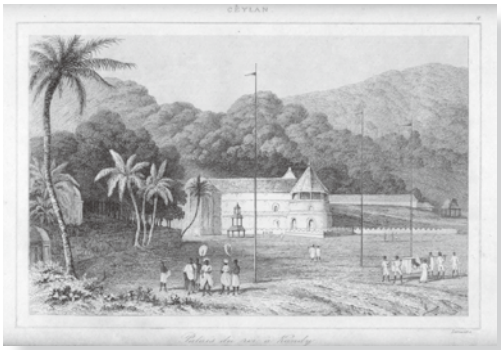
INDO-CHINE 2

INDO-CHINE 3

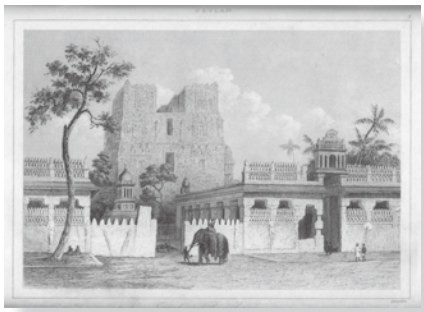
INDO-CHINE 4

CEYLAN 1

CEYLAN 2



CEYLAN 3



CEYLAN 4

JAPON 1·2

日本地図

JAPON 3

富士山(フジヤマ)

JAPON 4

火山(ミタケ)

JAPON 5

帝と奥方達

JAPON 6

将軍の施設

JAPON 7

将軍と奥方

JAPON 8

大将

JAPON 9

江戸の宮殿

JAPON 10

長崎

JAPON 11

移動式の礼拝堂

JAPON 12

桑の吊り橋

JAPON 13

日本の家

JAPON 14

日本人の男女

JAPON 15

化粧室

JAPON 16

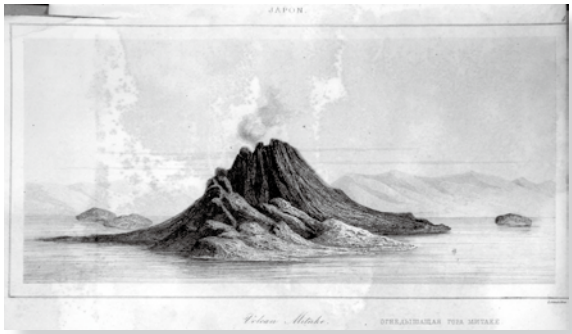
正餐と余興

〔20〕 ロシア語版『日本をめぐる旅』（神奈川大学図書館蔵）

JAPON 3

富士山（フジヤマ）

JAPON 4

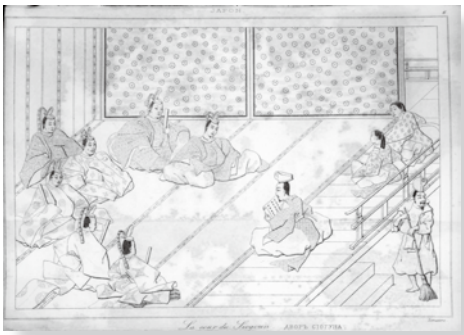


火山（ミタケ）

JAPON 5

帝と奥方達

JAPON 6



将軍の施設

JAPON 7

将軍と奥方

JAPON 8

大将

JAPON 9

江戸の宮殿

JAPON 10

長崎

JAPON 11

移動式の礼拝堂

JAPON 12

糸の吊り橋

JAPON 13

日本の家

JAPON 14

日本人の男女

JAPON 15

化粧室

JAPON 16

正餐と余興

日本帝国図

JANCIGNY」(ドゥ・ジャンシニー)である(4)。彼は来日したことはないが、シーボルトの他にケンペル、ティツィング、クルーゼンシュテルンらの著作を参考にまとめている。

ロシア語版の図版と、『JAPON,INDO-CHINA』の図版すべてを一覧にして示す。『JAPON,INDO-CHINA』のインドシナとセイロンに関する図版を除いた、ほぼすべての図版をロシア語版でも確認できる。違うのは日本周辺図のみである。現段階では、1854年刊のロシア語版図版は、1850年刊『JAPON,INDO-CHINA』で使用した石版をサンクトペテルブルグに運び、ロシア語のタイトルを追加して印刷したものか、またはパリで印刷してサンクトペテルブルグに運んだものなのか明らかでない。ともかく、地図を除いた他の図版は寸法も、タイトルも完全に一致しており、同じ石版による印刷である。

さらに、『JAPON,INDO-CHINA』の日本に関する記事の目次と、ロシア語版1・2巻の目次を比べると、多くの部分で重なっており、ストローエフが図版だけでなく、本文についてもこの本をネタ本にしていたことが分かる(5)。しかし、ストローエフはジャンシニーについて何も記していない。ロシア語版の内表紙には、シーボルトの他にケンペル、ティツィングなどの成果によることが記されるのみであった。ジャンシニーはシーボルトやケンペル、ティツィングなどの著作が参考文献であることを明記していた。ストローエフはそれを内表紙に記したのである。

1854年、サンクトペテルブルグで刊行されたロシア語版3巻本は、地図を除いたすべての図版をジャンシニー『JAPON,INDO-CHINA』から、第1・2巻の本文もほぼジャンシニーから、そして第3巻のみフランス語版『NIPPON』本文編の第5巻から翻訳されている。

次に地図について検討しよう。『JAPON,INDO-CHINA』における日本関係図版の「1」「2」番は日本周辺の図であった。なぜストローエフはこの図を使わなかったのだろうか。

〔注〕

(1)宮崎克則「シーボルト『NIPPON』のフランス語版」(『九州大学総合研究博物館研究報告』6号、2008年)。

(2)町田市立国際版画美術館の佐川美智子氏のご教示による。

(3)(5)『JAPON,INDO-CHINA』、九州大学付属図書館蔵(経済111.J.2)。この図版には、フランス語版『NIPPON』図版に含まれていない絵もあるから、ジャンシニーはドイツ語版『NIPPON』図版から石版を作成したと考えられる。『NIPPON』では、「将軍」と「奥方」はそれぞれ別々の図版であったが、ジャンシニーは1枚にまとめている。同じように、「石橋助左衛門」と「おたくさ」も「日本人の男女」として1枚にまとめられている。
『JAPON,INDO-CHINA』の「JAPON」目次を掲載する。これを見ると、ロシア語版第1・2巻の目次と多く重なっていることが分かろう。

序論	(1)
地理概論	(4)
植物相	(9)
気候	(13)
主要産物	(15)
民族概論	(18)
日本の第一印象、服装など	(20)
出島におけるオランダ商館の歴史	(29)
江戸へのオランダ人使節団の旅	(55)
江戸への旅行	(63)
江戸の描写ー将軍との謁見ー	(70)
出島への帰還ー都・内裏・帝の描写ー	(86)
大坂ー日本の商業中心地ー	(94)
日本の歴史の概要	(100)
日本の国制	(111)
行政ー8つの身分ー	(115)
日本人の風習・習慣	(122)
日本人の性格を理解するに適した話	(134)
日本の神話と宗教	(144)
日本語ー文学と詩ー	(154)
日本の科学ー天文学・時間の単位ー	(163)
日本の芸術と産業ー漆・装飾・武器などー	(169)
商業と海運ー交通路・農業・園芸などー	(175)
日本へ参入するためのヨーロッパ人の努力	(186)
1846年、長崎でのフランス船停泊	(203)
日本の将来に関する考察	(204)
日本列島の南と北に存在する日本の領土	(206)
蝦夷と近隣の国々	(207)
琉球列島	(217)
年表	(223)
度量・重量と貨幣の表	(226)
日本地図についての覚書	(229)
主要参考文献のリスト	(230)

(4)大森實「シーボルト父子の文化的影響」(同編『シーボルトと日本の近代化』、思文閣、1992年)

4.日本周辺図の検討

ジャンシニー『JAPON,INDO-CHINA』のなかの日本関係図版の1･2番が日本地図、3番が富士山、4番が桜島（火山）と続く。9番の「江戸の宮殿」はモンタヌス『日本誌』からの引用であり、他は『NIPPON』図版を原画とする。ただし、『NIPPON』では「将軍」と「奥方」はそれぞれ別の図版であったが、ジャンシニーは1枚にまとめている。同じように「石橋助左衛門」と「おたくさ」も「日本人の男女」として1枚にまとめている。

1･2番の日本地図について、直接的な原画を『NIPPON』のなかに見出すことはできないが、『JAPON,INDO-CHINA』刊行の1850年までに出た『NIPPON』のなかの2枚の日本図をもとに作成した（1）。1つは1832年の『NIPPON』第1回配本で出た「日本辺界略図」、もう1つは第9回配本の「日本人作成による原図および天体観測に基づく日本国地図」であり、「1840」の年号が付されている。

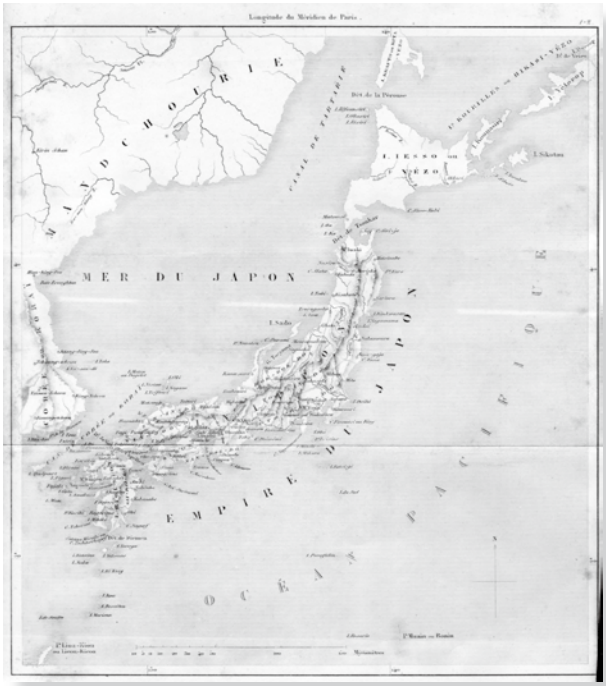
「日本辺界略図」は日本を含めた東アジア地域を概観できる地図であり、当時のヨーロッパでいまだ不明だった樺太（サハリン）について、これが島であるとして「St. Mamia（Seto）1808」と記し、シーボルトは間宮林蔵の成果であることを強調している。この原図は、幕府天文方の高橋景保が文化6年（1809）に銅版で試作したものであり、シーボルトはこれを高橋から貰っていた。その「日本辺界略図」は今もライデン大学図書館のシーボルト･コレクションに残っている。それには、シーボルトも読むことのできたカタカナが地名の横に朱書きされている。

「日本人作成による原図および天体観測に基づく日本国地図」も高橋景保から入手した伊能忠敬による実測図の写しを原図とする。この地図などが原因で、いわゆるシーボルト事件が起こった。事件で、幕府に没収された日本図は現在、国立国会図書館にあり（番号: YR8-N101.103.105）、樺太を含めた日本は3枚に分割して描かれている。シーボルトは写しを作って持ち帰っていたので情報を失わないですんだ。これに自身の観測結果などを入れて編集したのが「日本人作成による原図および天体観測に基づく日本国地図」である。ここでは、イギリスの王立地理学協会が所蔵する日本図を掲載している。これは、シーボルトが『NIPPON』のなかの地図類を集めて出した1851年刊の地図集に再録したもので、年号は「1841」年となっている。

2つの日本図などをもとに編集された『JAPON,INDO-CHINA』の日本図において、樺太･千島列島は全体図でなく、南部のみの部分図となっている。そのために、ストローエフはこれを採用しなかったと思われる。ロシアにとっての関心事は樺太（サハリン）や千島列島にあるから、それらが描かれている「日本辺界略図」をもとに、彼は新たに石版を作ったのである。『NIPPON』の「日本辺界略図」（内寸 縦21.4㎝×横33.0）に比べると、ロシア語版の「日本辺界略図」（内寸　縦17.9×横27.6㎝）は少し小さく、地名などはロシア語に変更され、原図にあった篆刻の「日本辺界略図」は省略され、中央下部に「シーボルト製の日本帝国図」とあり、右下には「ЛИТ Крайя」（Kraya石版所）とある。サンクトペテルブルグで活動していたドイツ出身の「Kraya」が石版を作成している（2）。ストローエフが新調した「日本辺界略図」は、ロシア語版3巻の巻末に折り込みで挿入されている。

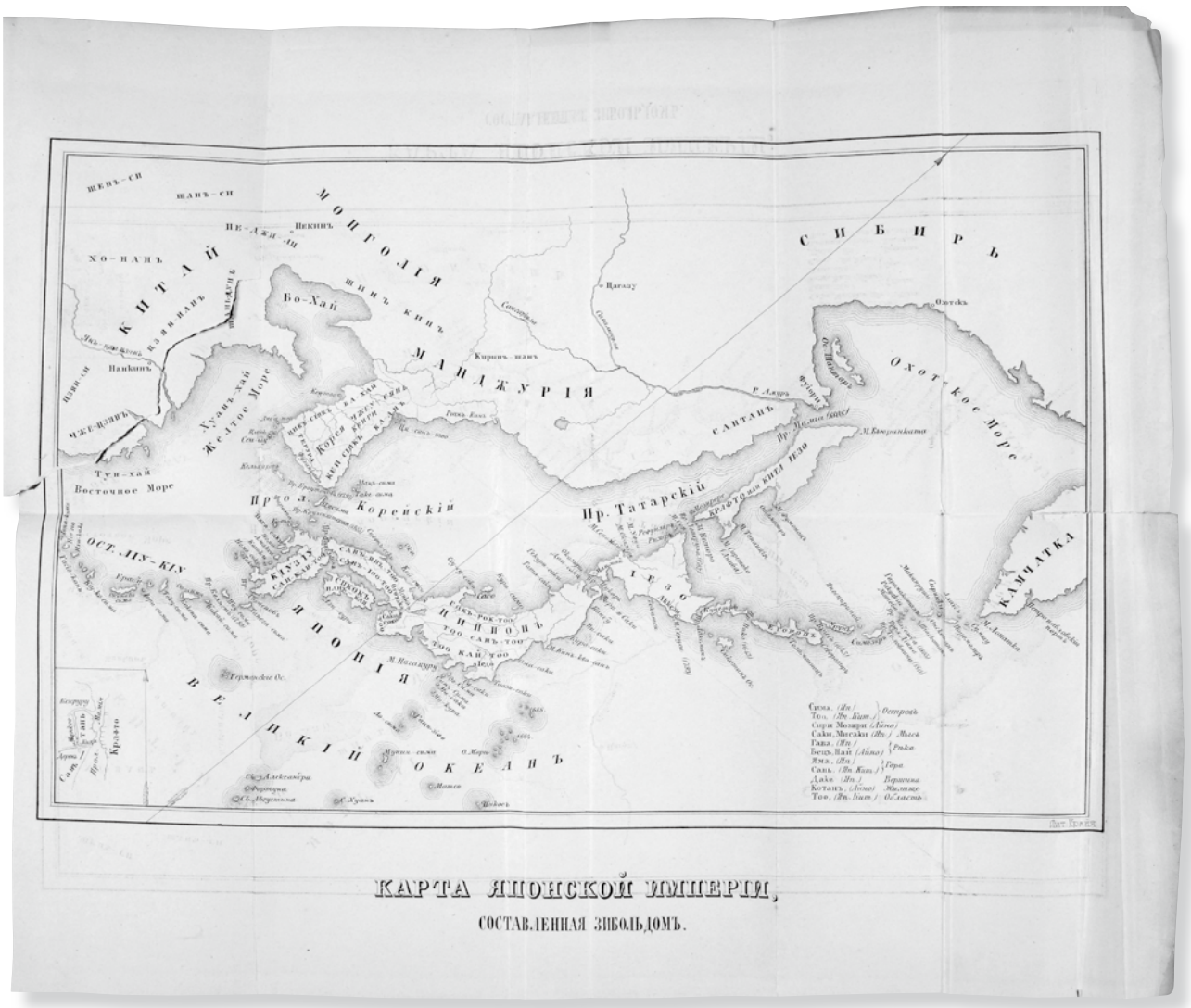
〔注〕
（1）ジャンシニーが記した「日本地図について覚書」によると、シーボルトの他にクルーゼンシュテルン、1845年の「Vincendon-Dumoulin」の地図を参考にしている。
（2）アンドレイ氏（Andrey Sokolov）のご教示による。

〔21〕『JAPON,INDO-CHINA』の日本図（1-2）



九州大学付属図書館蔵

〔22〕 ロシア語版の日本図



神奈川大学図書館蔵

〔23〕 ドイツ語版『NIPPON』の日本辺界略図

九州大学付属図書館医学分館蔵

〔24〕 日本人作成による原図および天体観測に基づく日本国地図

（イギリス）王立地理学協会蔵

おわりに

ストローエフがロシア語版を出した1853-54年頃、欧米ではどのような動きがあったのだろうか。アメリカでは、1852年1月、ペリーが東インド艦隊司令長官となるよう招請を受け、同年11月24日、東海岸のノーフォークを出港するまでに日本遠征の準備が進められていた。アメリカ艦隊に同乗する画家のヴィルヘルム・ハイネは1852年9月28日付でニューヨークからオランダのライデンにいたシーボルトへ手紙を出し、同じくジャーナリストのベイヤード・テーラーも1852年10月21日付でロンドンからシーボルトへ手紙を出している。何度かの往返信があり、それらの手紙や草稿など約30点は、シーボルト子孫が居住するドイツのブランデンシュタイン城博物館に残っている。ハイネらの依頼は、シーボルトが日本滞在中に築き上げた人間関係を利用し、来日した際の日本研究の情報を得ることのできる人物への紹介であった。シーボルトは、バタヴィア在住のドイツ人でかつて自らの助手を務めていたビュルガーなどを紹介し、日本人への紹介状は日本人と外国人との直接交流が禁止されていることを理由に断っている(1)。

シーボルトは、ロシア政府がアメリカの動きを追って開国交渉のためにプチャーチンを訪日させる情報をつかむと、1852年11月8日付で、プロイセン駐在のロシア外交官メイエンドルフ男爵に手紙を送り、対日交渉の方策について進言した。すでにプチャーチンは1852年初秋にサンクトペテルブルグを出港していたが、ロシア政府はシーボルトをロシアに招く。53年1月、サンクトペテルブルグにやって来たシーボルトは、ロシア帝国東シベリア総督ムラヴィヨフに会い、さらにロシア宰相ネッセルローデに会って、日本との国交樹立のための方策やロシアと日本の締結すべき条約案などを提出した。シーボルトの意見を取り入れたロシア政府は、1853年2月24日(露暦)付で、プチャーチンへの「追加訓令」を出す。プチャーチンはこれを小笠原諸島父島の二見浦でロシアの伝書使から受け取る。当初の計画では、プチャーチンはペリーの後を追って江戸湾に入り、ロシア皇帝より将軍への親書を渡す予定であったが、シーボルトの意見を取り入れた「追加訓令」には唯一の開港地である長崎へ向かうことが指示されていた。こうしてペリーは53年7月に江戸湾の浦賀沖に到着し、その1ヶ月半後にプチャーチンは長崎に投錨する(2)。

ストローエフがロシア語の『ПУТЕШЕСТВIЕ ПО ЯПОНIИ』(日本をめぐる旅)を出したのはこのような時であった。出版は54年であるが、印刷許可は53年6月に出ており、ロシアにおいて日本への関心が高まっていた時である。53年1～3月、サンクトペテルブルグに滞在していたシーボルトが出版に関与した形跡はなく、翻訳者・記者のストローエフが独自に編集した日本関係の手引き書であった。縦18㎝×横12㎝の本書は、ポケットに入るような小型の本であり、実用書の体裁となっている。

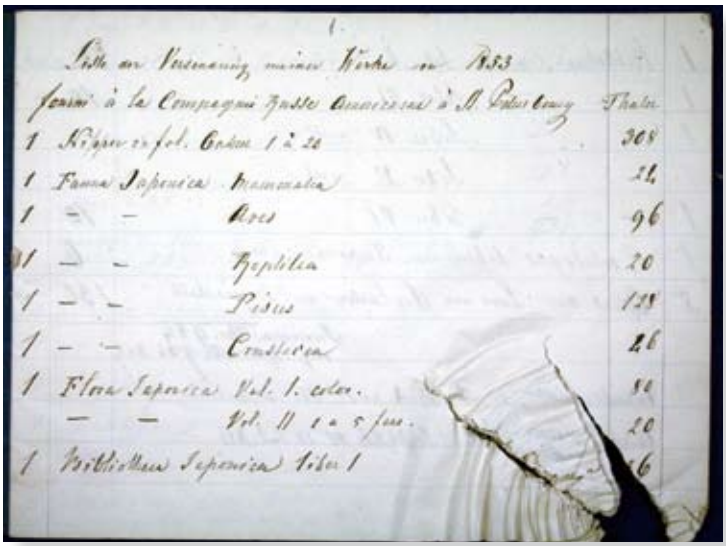
このような手引き書は1841年にロンドンでも出版されていた。バスク夫人『Manners and Customs of the Japanese,in the Nineteenth Century』(19世紀日本人の風俗習慣)は、副題に「DR.PH.FR.VON SIEBOLD」とあることから、かつて『NIPPON』の英語版とされていたが、これはシーボルトやケンペル・ツュンベリー・フィッセルらの著作を抄訳したものであることが明らかになっており(3)、『ПУТЕШЕСТВIЕ ПО ЯПОНIИ』も同様のものである。

1853年にペリーらが日本へやって来た後、多くの欧米人による実体験にもとづく日本見聞記が出版されるが、その直前の時期には本稿で見たように、それまでに出ていた日本関係著作をもとに手引き書的にまとめた書物がイギリス、フランス、ロシアで出版されている。本稿では目次を検討したのみで、本文内容を検討していないので詳しいことは不明である。それらの書物には、どのような日本イメージが語られているのだろうか。

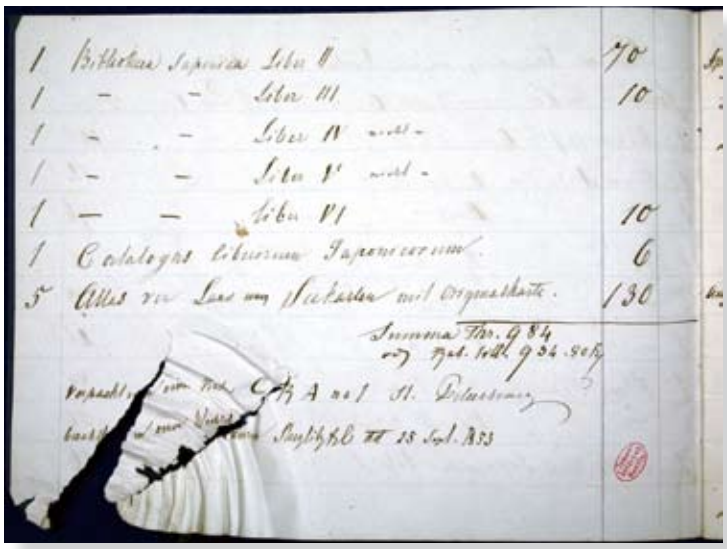
なお、シーボルトにとって、1853年のサンクトペテルブルグ訪問は自身の著作販売にとって有意義であった。ドイツのボフム大学図書館にあるシーボルト・コレクションに『ロシア発送のシーボルト著作販売帳　1853年』がある。これは『NIPPON』や『日本植物誌』・『日本動物誌』などの発送台帳であり、購入者はサンクトペテルブルグのロシア帝国参謀本部・ロシア政府アジア局長ニコラス・ルヴィモフ・ロシア政府国務卿デ・ストロガノフ大公伯爵・ヘレーネ大公妃・ロシア帝国海軍水路測量部門等の政府関係や書店のゲーツ商会などである。『NIPPON』(1～20分冊)の価格は、2折判の色つき版が308ターラー、4折判の色なし判が187ターラーであった。当時の平均的な労働者の年収は120～160ターラー(4)。

〔25〕『ロシア発送のシーボルト著作販売帳 1853年』（シーボルトの直筆）

（1）



（2）



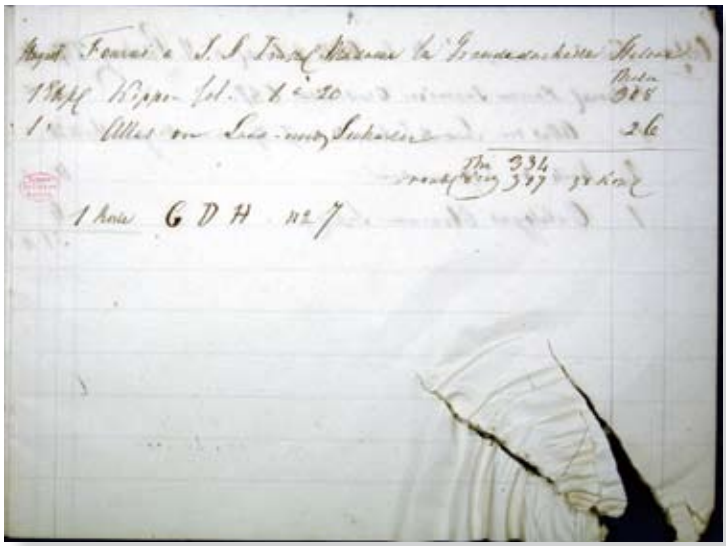
（3）

（4）

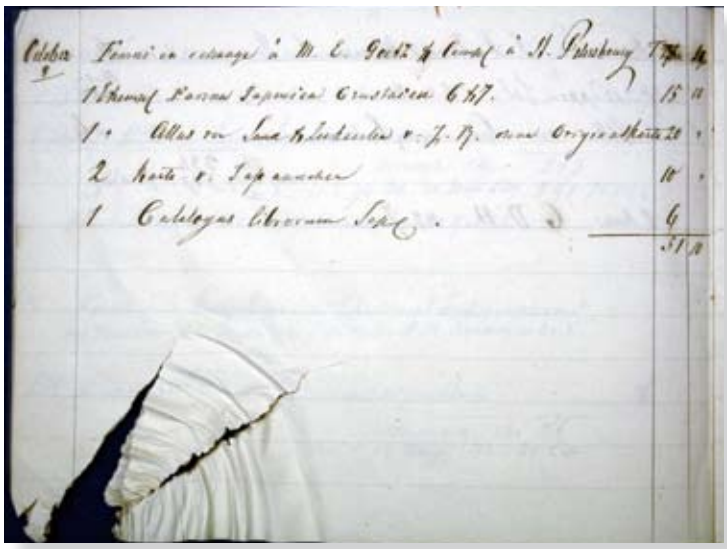
（5）

（6）

(7)



(8)



(9)

(10)

(ドイツ)ボフム大学図書館蔵

〔注〕

(1)宮坂正英「シーボルトとペリーのアメリカ日本遠征隊」(箭内健次他編『シーボルトと日本の開国　近代化』、続群書類従完成会、1997年)。

(2)保田孝一「ロシアの日本開国交渉とシーボルト」(箭内健次他編『シーボルトと日本の開国　近代化』、続群書類従完成会、1997年)。露暦(ユリウス暦)は1917年の革命まで使用されていた。18世紀では11日、19世紀では12日をプラスすると西暦(グレゴリオ暦)となる。

(3)梶輝行「英語圏に於けるシーボルト『日本』の影響1.2」(『日蘭学会会誌』12-2号・13-1号、1988年)。

(4)ヨーゼフ・クライナー「三人のシーボルト」(同氏編『黄昏のトクガワ・ジャパン』、NHK出版、1998年)。